

IV. 広東での調査視察

三根 真理子

長崎大学医学部附属原爆被災学術資料センターは、中国の北京にある衛生部工業衛生実験所との間で日中共同研究「放射線被爆者における老人性痴呆の疫学的研究」を行なっている。数年前から綿密な打合せや調査方法の協議などを繰り返し、やっと念願の調査が完了した。日本から調査の精度や現地の状況を確認し、データ解析や今後の方針を討議するために平成7年4月に岸川助教授、精神科の菅崎弘之医師、私の3名が現地、広東に出向くことになった。

福岡空港発、10時30分のキャセイパシフィックにのりこんだ。台北着12時40分、機内で待つ事、約1時間、香港着14時25分、時差の1時間をあわせて5時間の移動であった。この間に2回も機内食がでた。朝食と昼食なのだろう。しかもステーキとぎていいる。和食党で少食の私にはやや苦痛であった。林立する高層ビルの間を飛行機はすいこまれるように香港空港に着陸した。入国手続きで外人の所に並んでいると「香港居民」の所へ行けと係の人が指示する。私は香港居民に見えたのだろうか。同行者は私の背中のリュックのせいだろうという。これを初めとして何かにつけ、私だけ特別扱いの珍道中が始まることになった。

<香港から広州へ>

香港より列車にて広州へいかなければならない。最初は日本と同じ感覚でホテルで切符を予約するつもりであった。いざホテ

ルにて切符を予約しようとするすると予約システムはないという。旅行社に電話をかけてみるが、あいにくの土曜日で時間外にて「だれもいない」とあっさりの返事。いまだ信じられず右往左往して九龍駅へ向かう。販売は5時30分までということで購入はできないままに不安をかかえてホテルにもどる。ホテルのボーイさんは「朝7時50分に乗るには1時間以上前から並ばないと乗れないかもしれない」と言う。そんなばかな。日本ではまず考えられない。3人共に意気消沈して顔色も心なしか、やや青ざめてみえる。不安な一夜を過ごし、翌朝、必死の思いで6時40分にホテルを出発。九龍駅の切符売場にて並ぼうとすると怪しげな男が切符を買えとすすめる。「もう座席はないからこれを買えば座れる」と言う。確かに我々が乗ろうとしている列車は、掲示板によると「満座」と表示されている。買えとすすめる切符は、確か香港ドル(HK\$)270と言った気がする。正規では215ドルの切符である。いわゆる「ダフ屋」のようであるが、ほんものかどうかわからないのでその誘いにのらず並ぶことにする。我々の後ろに並んでいる若い男女のカップルに座席はあるのかと尋ねると「立つことはないだろう。」と言う。一体、何が真実なのかわからないままにやっと切符を手にした。「加位」と書いてある。何のことかよくわからない。スーツケースを3個預けるHK\$217、高い。3時間のみちのり

を立つこと覚悟で乗り込む。列車の乗り口に女性の車掌が待っていて「10号車に行け」と言う。列車の中には座席番号が書いてあり、どうも指定席らしい。英語のしゃべれそうな人に尋ねると「加位」とは「エクストラシートのことだ」と言う。これは補助席？しかし補助席らしきものはない。よくみると列車と列車の間のトイレの近くに2つ補助席があるではないか。なんと質素な席であろうか。なにはともあれ立たずにはすんだのである。

しばし走り、やや田舎の風景になった所で食堂車へ向かう。中式と洋式があり、HK\$ 25、中式を注文。お粥と春雨の炒めもの、お茶であった。まあまあ味。洋式とはパンとコーヒーである。車内販売をじっと眺めているとコップにティーバッグを入れて渡している。何なのだろうと不思議に思っていると、しばらくしてやかんを持って来てお湯をついでいく。

そうこうするうちにやっと広州駅に到着。10時30分であった。20分前からたくさんの人が降りる準備をしている。何のためだろう？終着駅なのに…。列車を降りてやっと理由がはっきりした。何やら入国手続きが必要ですごい行列と混雑であった。荷物も無事ついたらしく受け取って出口へ向かう。時刻変更のため約束の時間より40分程早く到着。広州駅に無事ついたものの、今度はちゃんと迎え人と会えるかやや不安であった。広州駅前の人の多さにまた驚く。30分程待つと迎えが来た。陶教授、査先生、丘副所長、李先生、楊先生の5人でぞろぞろと来てくださった。ほっとするやらうれしいやらであった。

<広州から恩平へ>

まだ新車の匂いがするトヨタエースの12人乗りに乗り込み、いざ恩平へ。たっぷり4時間はかかるという。1時間程走った所でランチタイム。魚のスープのおいしさに疲れも吹き飛ぶ。米の粉で作った麺がとてもおいしかった。やっといきかえった心地がした。高速でもない道路を時速120kmで走る運転手の腕のすごさは高度で絶妙、しかしかつ恐怖でもあった。恩平市の僑聯大厦 (Qiao Lian Building) に到着。やっと一息。妙に長い道のりであった。日本だと東京までの感覚だろうか。2時間の休憩は非常にありがたかった。ホテルのレストランにて夕食をとる。夕食後、1時間程ミーティング。私は一日5杯はコーヒーを必ず飲むのが習慣になっているが、この日ばかりは1滴も飲んでいない。しかし味はどうあれやっとの思いでコーヒーにありつくことができた。10時少し前にやっと開放される。

<恩平にて>

中国2日目。8時朝食。恩平市保健所の副所長も一緒である。めん類、お餅、しゅうまい…。あまりの種類の高さに思い出せない。広州では朝からこんなにたくさん食べるのだろうか。私は甘いものが好きだからおいしいお餅を頂いた。いよいよ調査現場へ向かう。20分程、車を走らせて対照地区のひとつである蝦山管理区に到着。蝦山管理区衛生所と看板がある。医師が2名待機している。しばらくすると赤ちゃんを抱いた若い母親がやってくる。何やら問診をしている。赤ちゃんが発熱して食欲がないと訴えているらしい。医師は薬を投与し、

5つ玉のジャンボサイズのそろばんをパチパチとはじいて請求すべき病院代の計算をする。診察、計算、投薬を全て一人で行なうのだ。赤ちゃんは1才6ヶ月であった。しかし、名前はまだないとのことであった。この温厚な医師の案内で村へ向かい、民家を訪問する。暗い家の中。土間のような所で椅子に座る。コップにお湯をついでくれる。その精一杯の歓待ぶりに感激してお湯を飲む。村の風景は水が少したまった小さい池のような所で洗濯をしている。あひるのような鳥がウロウロしていて道はそこらじゅう、糞だらけ。よけて通らないとふみそうになる。だが注意したにもかかわらず岸川先生はべったりと踏んでしまった。30年前の岸川先生の郷里にも、似たような光景があったような気がするとのこと。そんな所を平気で裸足で歩いている。これでは衛生状態はよくないだろうと心配になってしまった。寄生虫の罹患状況をたずねたら、やはり高いという返事であった。ともあれ、こののどかで静かな風景は、日本の多くの田舎では失われていると思えて、ある種の郷愁にひたった。この村では2人のおばあちゃんに会った。老人性痴呆など全く考えもおよばないほど、なかなか元気で明るい人達であった。

<恩平から陽江へ>

いよいよ高自然放射線地区である陽江市へ向かう。車で1時間40分。ランチタイム(海陽大酒店)となる。陽江市衛生局の林乾芳副局長、陽江市陽東県の李学義衛生防疫所長など偉い人達と食卓を囲む。おいしかったけれど何を食べたのか気もそぞろであった。午後、町の病院である北貫医院进行

訪問。北貫という町は4万人ぐらいの人口らしい。この医院は16人の医師と30人の看護婦で、主に児童の疾病(小児麻痺、白痴)や予防を行なっている。医院の院長室らしき所でも出されたものはミネラルウォーターのボトル(700ml)であった。その場で飲む人もいたが、さすがに我々日本人は、習慣が異なるので失礼にならないようにもちかえる。医院の訪問を終え、2時、吉水塘村(チースイタンスン)へ到着。ここでは村長さんに会う。約600人の村である。たくさん子供がいて午前訪問した村よりやや文化がすすみ、経済状態もやや高いとのこと。明るい感じがした。村長さんがでっかい水煙草を吸っていたのが印象的であった。水煙草と発癌の関係も質問したが、陶先生によると有意な関連はないとのことであった。記念の集合写真をとろうとすると村長さんは慌てて折り曲げたズボンの裾をおろしていた。長老の一人である老婆との短い懇談の機会を得たが、彼女も腰が少し痛い以外は他に訴えはなく、ましてや老人性痴呆などどこ吹く風かといったような、とても楽しい老人であった。

これで今日の視察は完了。恩平市へ向かう。途中、中国銀行にて両替をする。トラベラーズチェックから中国円にするのが難航した。楊先生の身分証明書に始まり、丘副所長が衛生部の書類を持ってくるやらさんごんもめたあげく約1時間後に…。私は現金の両替で問題なし。中国は現金に限ります。

5時ホテルに到着。1時間の休憩後、Formalなディナーが始まる。中共恩平市委員会の陳培根宣伝部長が出席。比較的若く感じられたが、いかにも切れそうな人であ

った。昨夜、しきりと一人でとりしきっていた防疫所の沈所長が静かであった。やさしい顔の莫副所長など10人ぐらい集まる。老酒をかかげての乾杯の回数多きにはほとほと驚いた。7時40分、やっと開放される。

恩平市最後の夜と思うと周りを散歩したくなり、ぶらりと外へ出る。果物やお菓子など夜店みたいな店がおもしろく、子供の頃のお祭り気分である。バイクが4台ほど並んでいる。何をしているのかと聞くと、「あれは客を待っているのだ」という。つまり、ここはタクシーがないのでバイクがタクシーの代わりなのだそう。どうりであちこちにバイクが待機していると思った。40分程の散歩を終え、ティータイムと称してまた集合し、日本側の3名と陶、査、楊、李の各先生とで調査に関するミーティングを行なった。一次調査（長谷川式スケール）は対象地区505人、高自然放射線地域513人に対して実施され、老年性痴呆は61例あったこと、サンプリングや診断についての報告がなされた。午後9時40分にミーティングが終了。日本は10時40分。

<恩平から広州へ>

中国3日目。7時40分。チェックアウト。502元なり。このホテルは「先進単位」と書いてある。意味はこの市で一番よいホテルという「お墨付き」のペナントとのこと。

15分程走ると恩平市人民医院に到着。ここはさすがに大きい。400床、医師と看護婦で約500人。神経内科と病理室をみせて頂く。開平市、鶴山を経て1時間半走ったあたりでパトカーに捕まる。80kmを100kmで走っていたらしい。なんとかおさまった

らしく、すぐに走り出す。夕方、広州のホテル「広州賓館」に着く。

陶教授と査先生が夕食を御馳走して下さいという。タクシーに乗ること20分。いつ死んでもおかしくない運転であった。窓がこわれていてしまらないのでほこりだらけの風がふき込む。座席は埃でザラザラしている。恐怖の20分であった。「命懸のディナー」とでも呼びたくなった。しかし、味は査先生ご推薦だけあってとてもおいしく、またインフォーマルな陶・査両先生の心遣いには心をうたれた。

<広州>

中国4日目。広州市精神病院を訪問。広東には4つの精神病院があり、その中でも最も大きな病院とのことである。1,000床、150人の医師、350人の看護婦、900人のスタッフ。医師の多さに3人とも驚いてしまった。日本では考えられないことだ。痴呆病室と分裂病室を見学する。病室は男性と女性でわかれていた。見学の後、レクチャーが始まる。日本側は菅崎医師が「長崎市における老人性痴呆の調査」と題してレクチャーを行なう。熱心な聴衆で流暢な英語で質問がくる。非常に的を得た質問であった。中国側は陸副院長が「中国における老人性痴呆の実態」を紹介して下さい。今回の調査における診断は精神科の医師、方先生と馮先生が2人で行ない、さらに陸副院長が最終のクオリティー・チェックを行なったという。

最後の訪問は広東省職業病防治院であった。王方能所長をはじめ副所長が3人（丘喜怡、沈夏生、謝万力）ずらりと並び、快く対応して下さい。ビデオカメラで撮影

するやらカメラで写すやら、大騒動であった。この研究所の研究目的は3つある。1. 公害、2. 放射線の影響、3. 職業病である。研究者は180人くらいいるとのこと。楊先生は調査のため広州市精神病院で3ヶ月トレーニングを受けたそうだ。

広州最後の夜、畔溪酒家(Pan Xi Restaurant)でお別れの宴がもたれた。有名人が訪れているという高級レストランで、中国の最高実力者の鄧小平氏も家族と共に来たらしく、スナップ写真が飾られていた。私にとっては一生に一度の経験であろう。湖のところに建つ館で広さは10,000㎡という。美食というのはこんなものかもしれないと考えながら美しさと上品さに陶醉した。広東料理は味付けが北京に比べて甘いらしく、私達日本人の口にはあうようだ。我々が「好食(ホウセ：美味しい)！」と答えると、北京っ子の李先生は「北京の料理が最高だ。」とつつこむ。李先生は北京びいきで、広東での数日、食事の度に広東の先生方とのやりとりは、いつも笑いの種であった。精神科医菅崎先生の診断によると李先生は「重度のホームシック」ということであった。調査のために2ヶ月間、広東に滞在したのである。言葉についてもこだわっていた。李先生は広東語が理解できないそうである。「北京語が中国唯一の標準語であって、もっともビューティフルなのだ」と、ことあるごとに訴えていた。

<広州から香港へ>

中国における調査現場の視察、病院訪問、研究に関する討議を終え、日本への帰路につく。5人の先生方に国境まで送って頂いた。入国手続きに30分かかったろうか。

私達が手続きをおえるまで待つて下さった。最後まで皆さんで手をふり別れを惜しみながら国境を越えた。歩いて橋を渡ると羅胡駅がある。4時の列車に乗り、40分後には九龍駅へ到着。全てのスケジュールを無事終え、3人とも、安心と共に疲れがでたようであった。

<日本へ>

最後の夜、香港の夜景を部屋からながめながらぐっすり眠った。あとは飛行機にのり福岡へ向かうのみ。

香港での荷物のチェック、出国手続きは1時間。私のスーツケースを開けよとの指示。なんと目覚まし時計の電池をはずせというのだ。物騒な世の中だから時限爆弾の可能性ありと判定されたいらしい。

キャセイパシフィック航空の飛行機は台北経由のため、往路と同じく台北の空港では機内にて約1時間ほど待たなければならない。日本にいと無性にもつたいない時間であるが中国の風に触れ、平気で待つことができた。ほんの数日で中国時間に慣れてしまった。

夕方、日も暮れた頃、福岡空港に着く。荷物の受取や帰国手続きは15分で終えた。やっぱり日本は速いと思った。中国での入出国はほぼ1時間。何をすることも時間がかかるし、かならずしも効率的とは言えないようにも思えたが、それもまたおらかな国民性によるものであろう。地下鉄にのり博多駅へ。私にとって最後の難関である博多駅。理由は30kg近い荷物をかかえ階段を登らなければならないからである。最後の力をふりしぼって抱えようとした時、「お持ちしましょう。どちらのホームですか。」

と親切に持って下さった。天の助けだと思った。「私はJRの職員です。」と笑みをうかべて去っていかれた。「ありがとう。JRさん!!」JRの身にしみる親切はこれで2回目である。

中国での数日は生活面ではなにかと不自由と覚ることもあったが、調査については日本側の希望通りの対象数と方法で実施されており、精度も高い納得のいくものであった。調査現場視察の感想は、1. 調査員の人柄がよく、優秀であること、2. 診

断については最高の精神科医が最終チェックをしていること、3. 毎日、調査項目の内容についてはその日の夜にチェックが行なわれていたこと、4. 調査対象者は純朴な村民であり協力的であることなどである。調査は信頼できるデータでないという意味のないものになる。今回の広東視察は、調査データの信頼性の確認ができたこと、また中国の暖かな人達と触れ合えたことなど実の多いものであった。